

日南・潮嶽神楽についての考察

山田 利博

(宮崎大学教育文化学部)

宮崎自動車道を田野インターで降り、南東に 15 kmほど下ったところに潮嶽神楽が舞われる潮嶽神社がある。何故この神社に注目するかと言えば、祭神が全国でも珍しい海幸彦だからである。海幸山幸の神話ぐらいいは誰でも知っていることと思うが、勝った山幸彦を祀る神社は、全国的にも枚挙に暇がないが、社伝に依れば海幸彦を祀るのはここだけとなっている。日本全国に神社が幾つあるかなど、恐らく誰も知らないことだから確認のしようもないが、軽く調査した¹⁾ 限りでは、これに反する結果は未だ得られていない。よしんば一でなかったとしても、余り多数に上るとも思われないので、注目する理由は充分にあると思うが、既に述べたように、ここに一つの神楽が伝承されている。

山口保明の言に依れば、宮崎は「神楽なしでは夜の明けぬ国」であり、その総数はおよそ 350 とされている²⁾ から、潮嶽神社にも神楽が残されていること自体はさほど奇異でもないが、既に山口の書でも指摘されているように、その神楽の中には明らかに特異と思われる曲目が含まれているのである。そこで本稿ではそれを入り口として、潮嶽神社、引いては宮崎の古代について思いをめぐらせてみたい。

なお、潮嶽神社は正確には南那珂郡北郷町大字北河内 8901-1 にあり、日南市に属するわけではないが、宮崎の神楽の先達・山口の分類によると、潮嶽神楽は日南地域の神楽とあるので、タイトルはそれに従った。

1. 潮嶽神楽の基礎的事項

前節でも述べたように、潮嶽神社では今も、建国記念の 2 月 11 日の昼間に、5 時間ほどかけて神楽が舞われている。山口の書に依れば、古くは 33 番もしくはそれ以上の演目を備えた夜神楽であったらしく、文化 3 年に行われた 36 番構成の番付表も掲げられているが、現在は規模が縮小されたようで、15 番構成である³⁾。後の説明にも使用するので、その番付を次に掲げておく。

番付	番付名	8	三番鬼神舞
1	奉者舞	9	阿智女舞
2	一番鬼神舞	10	御笠舞
3	繰下ろし舞	11	御酒上舞
4	二番鬼舞	12	御笠鬼神舞
5	剣舞	13	鉾舞
6	直舞	14	手力雄舞
7	魚釣り舞	15	箕取り舞

山口はこれを、主に献納物から、獵祈祷・作祈祷・漁祈祷の三つを合わせ持つのではないかとするが、5 番の「剣舞」を、山伏等の山岳宗教からの流入と見れば、基本的には首肯される考え方だと思う。贅言を付すれば、この神楽の祭壇に飾られる、陰陽道のものと思われる五色の幣や、観音や仏教の天の数と一致する「33」という番数等、宮崎の神楽における諸宗教の影響は一筋縄ではいかない⁴⁾ が、既に幾つか指摘がある如く、この番付で一番特徴的なのは 7 番の「魚釣り舞」⁵⁾ であろう。その曲名や次ペー



ジに掲げる写真から明らかな如く、疑いもなくこれは漁神楽と言えようが、問題は現在潮嶽神社のある位置は、海岸から 10 km 強入り込んだ場所だということで、そのような場所に何故漁神楽があるかということなのである。

勿論これは、全国的に見られる海岸線の後退という現象も考慮しなければならないだろうし、山口の説くところに依れば、この曲は「ウドメ（鵜戸舞）」とのことであり、日南という土地柄、鵜戸神宮の影響も当然考えられるところであろう。だがこの神社の祭神を考えれば、もう少し奥がありそうな気がする。次節ではその可能性について追求してみよう。

2. 海幸の性格

前節で言わんとしたことは、この神社の祭神が「海」幸であるから、山深いこの地でも「魚釣り舞」があるのだなどという単純な話ではない。周知の如く海幸とは、記紀神話の中で聊か特異な神なのである。

故、後に木花之佐久夜毘賣、參出て白ししく、「妾は妊身めるを、今産む時に臨りぬ。是の天つ神の御子は、私に産むべからず。故、請す。」とまをしき。爾に詔りたまひしく、「佐久夜毘賣、一宿にや妊める。是れ我が子には非じ。必ず國つ神の子ならむ。」とのりたまひき。爾に答へ白ししく、「吾が妊みし子、若し國つ神の子ならば、産むこと幸からじ。若し天つ神の御子ならば、幸からむ。」とまをして、即ち戸無き八尋殿を作りて、其の殿の内に入り、土を以ちて塗り塞ぎて、産む時に方りて、火を其の殿に著けて産みき。故、其の火の盛りに焼る時に生める子の名は、火照命。

此は隼人阿多君の祖。次に生める子の名は、火須勢理命。(細字注略)次に生める子の御名は、火遠理命。亦の名は天津日高日子穗穗手見命。三柱

故、火照命は海佐知毘古(細字注略)と爲て、鱸の廣物、鱸の狭物を取り、火遠理命は山佐知毘古と爲て、毛の麤物、毛の柔物を取りたまひき。

(岩波・日本古典文学大系『古事記』(以下、『古事記』の引用はこれによる)135ページ)

皇孫、未信之して曰はく、「復天神と雖も、何ぞ能く一夜の間に、人をして有娠ませむや。汝が所懐めるは、必ず我が子に非じ」とのたまふ。故、鹿葦津姫、忿り恨みまつりて、乃ち無戸室を作りて、其の内に入り居りて、誓ひて曰はく、「妾が所懐める、若し天孫の胤に非ずは、必當ず焦け滅びてむ。如し實に天孫の胤ならば、火も害ふこと能はじ」といふ。即ち火を放けて室を焼く。始めて起る烟の末より生り出づる兒を、火闌降命と號く。是隼人等が始祖なり。火闌降、此をば褒能須素里と云ふ。次に熱を避りて居しますときに、生り出づる兒を、彦火火出見尊と號く。次に生り出づる兒を、火明命と號く。是尾張連等が始祖なり。

(岩波・日本古典文学大系『日本書紀』上(以下、『日本書紀』の引用はこれによる)142ページ)

記したように、前者が『古事記』、後者が『日本書紀』の正文である。下線を付したように、特徴的なのは、天皇家の直系祖先に当たるはずの海幸が、何故か異民族と言われる隼人の祖と明記されていることで、『日本書紀』の中でも最も正統であるはずの正文においてもそれは変わらない。尤もその母である木花之佐久夜毘賣も、国つ神の大山祇の娘であり、『古事記』では「神阿多都比売」、『日本書紀』正文でも「神吾田津姫」という、『古事記』にも見られる隼人族の一、阿多を思わせる別名(『古事記』ではこちらが本名)を有するのであるから、もともとこの話は、天皇家と隼人一族の深い繋がりを意味していると思われるのだが、本稿の主旨とするところではないので深入りはしない。しかしこの潮嶽神社周辺には、隼人の習俗と伝承されるものが多いのである。

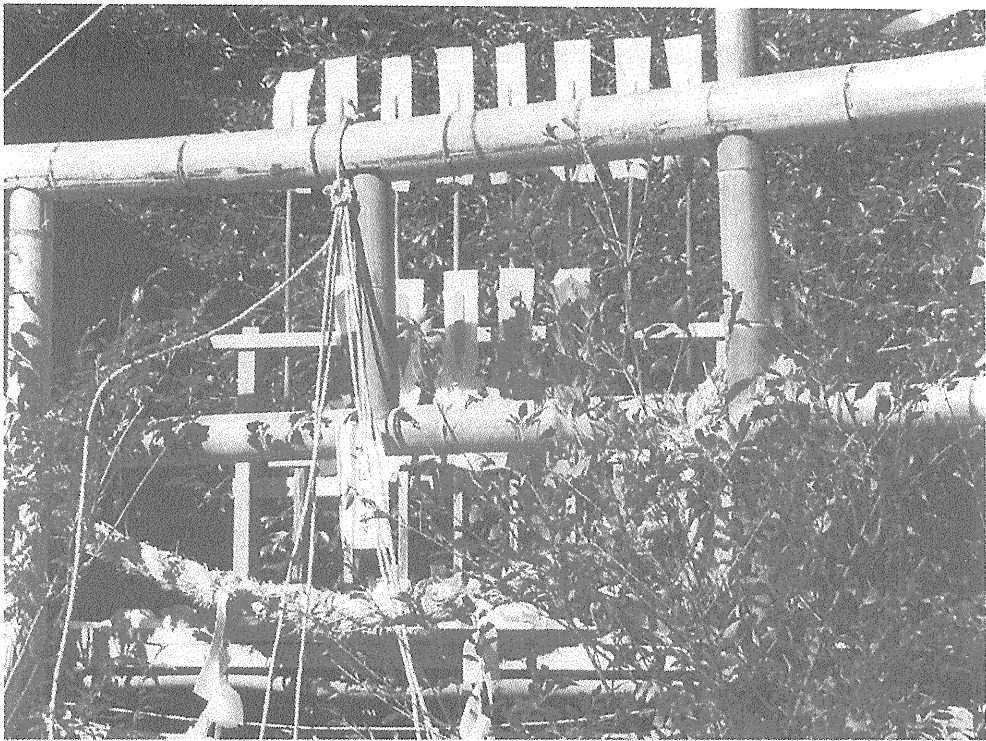
例えば潮嶽神社では、この神楽の他に秋祭りで獅子舞があるのだが、その「立藤舞」と呼ばれるものは、「海幸彦の化身舞とされ、隼人の宮門守護を形象したものと伝えられる⁶⁾し、潮嶽神社の由緒書にも、「初宮詣にあたっては、額に”犬”の字を書くという隼人の宮廷奉仕の古俗を偲ばせる習俗がある」と書かれている。言うまでもなくこれは、『日本書紀』一書第二に、隼人のことを「一に云はく、狗人」(175ページ)、或いは「是を以ちて火酢芹命(海幸彦のこと。稿者注)の苗裔、諸の隼人等、今に至るまで天皇の宮墻の傍を離れず、吠ゆる狗に代りて事へ奉れる者なり」(同ページ)とあることの反映であり、直接的に隼人の習俗と言えるか難しいが、後者の引用の直後には、「世人、失せたる針を債らざるは、此、其の縁なり」(176ページ)という、これも潮嶽神社の由緒書に見える、この辺りの風習と一致する語句も見られる。また、神楽の時に立てられる14の神名を書いた旗(次ページ写真参照)も、或いはそれと関係するのではないか。

宮崎の神楽のご多分に漏れず、潮嶽神楽も舞庭奥に祭壇を設け、その前で舞うのだが、舞庭を取り囲む旗というのは、何処にも見られるというものではない。そこに書かれた文字は、①振魂尊、②櫛磐間戸尊、③豊磐間戸尊、④豊樹滞尊、⑤天三下尊、⑥武乳連尊、⑦大戸道尊、⑧天八百尊、⑨萬魂尊、⑩国常立尊、⑪天八下尊、⑫天讓日國月彦舅尊、⑬

泥土煮尊、⑭天合尊と読める。このうち⑦、⑩、⑬はそのままの表記で『日本書紀』にある⁷⁾し、②と③はそれぞれ、櫛石窓神、豊石窓神の万葉仮名表記と思われ、それならば『古事記』に存在する⁸⁾。また、④は一字違うが豊斟淳尊のことであると思われ⁹⁾、ならば豊雲野神の別名として、『日本書紀』に存在する。しかし他の八神は、『日本の神様読み解き事典』(柏書房 1999年)等にも出てこないのも、恐らく記紀神話の神々でも一般的な民俗神でもないと思われる¹⁰⁾。



勿論これは、既に前節でも述べたごとく、祭壇の中央に五色幣¹¹⁾を飾るという、一般的に陰陽道の色彩が濃い宮崎の神楽の中でも特にそれが目立つこの神楽のことであるから、当然その影響は考えなければならないが、①、⑨、⑫のように、必ずしもそうとは思われない神名も混ざっている。これらの神々が隼人の信奉していたものだと、隼人の宗教までは全く分からない今の歴史学ではとても言えないが、先ほど述べたように記紀神でも一般的な民俗神でもないとするれば、その可能性も強ち否定できないであろう。そしてその可能性を考慮すれば、記紀神として確認できる六神(注8)で述べたように、正しくは五神)も、②と③が同一で天孫降臨の時に登場する御門の守護神¹²⁾で、④、⑦、⑩、⑬はいわゆる神世七代の神々であることも気になってくる。と言うのは、先ほど「立藤舞」のところでも述べたし、或いは『古事記』の負けた時の海幸の科白、「僕は、今より以後、



汝命の昼夜の守護人と為りて仕へ奉らむ」(143 ページ)にもあるように、隼人の職務は通常宮門守護と言われるし、神世七代は十柱の神々を、國之常立神と豊雲野神を別として、それ以外の男女神は一对で五代と数えるという、記紀でも他に類例を見ないので、陽数として奇数を重んじる中国向けに、三五七に合わせるため¹³⁾ではないかと、昔から言われてきた神々だからである。ここで言わんとすることはつまり、天皇家の直系の祖先である伊邪那岐・伊邪那美は別として、他のものは元来天皇家とは縁のない神々が、民族併合の結果取り込まれたもので、ここにその残滓があるのではないかということなのである。無論これは可能性にしかすぎないか、こういうところにこそ宮崎の民俗を調べる価値があると思うのである。

このように潮嶽神社には隼人の色合いが濃いのであるが、その隼人は、例えば日高正晴の言葉¹⁴⁾を俟つまでもなく、次の『日本書紀』神代下第十段一書第四の隼人舞の描写に見られる如く、海人族であると考えられる。

是に、兄、著犢鼻して、赭を以て掌に塗り、面に塗りて、其の弟に告して曰さく、「吾、身を汚すこと此の如し。永に汝の俳優者たらむ」とまうす。乃ち足を舉げて踏行みて、其の溺苦びし状を學ぶ。初め潮、足に漬く時には、足占をす。膝に至る時には足を舉ぐ。股に至る時には走り廻る。腰に至る時には腰を捫ふ。腋に至る時には手を胸に置く。頤に至る時には手を舉げて飄掌す。爾より今に及るまでに、曾て廢絶無し。

(184 ページ)

すなわち隼人の特徴たる隼人舞は、あたかも人が溺れる時の様に似ているということで、ここに幾ばくかの歴史性があるとすれば、それは隼人が泳ぎに長けた人(泳法によっては

溺れているように見える場合もあろう)、つまり海人族であることを意味すると思われる。また、そうであるが故に隼人の祖先は海幸なわけで、それと潮嶽神社が関係ありとすれば、今まで述べてきたような事象は、全て一筋に繋がるわけである。

さらに、これが後年の偽造ではない一つの証拠として、好き好んで自分たちの先祖が負けた方の部族だと宣言するかということを考えていたのだが、薩摩隼人に関する鹿児島人の親しみ、或いは、以前訪れた島根県人の出雲族であることの誇りなどに鑑みると、一概にそれは言えないようである。しかし、その場合は逆に矜持の対象として自分たちの先祖を捉えているということで、結果的には大差ない。もう少し地元の伝承を信頼してみたいと思うものである。

3. 隼人と宮崎

以上、潮嶽神楽が隼人の習俗と関係するのではないかという可能性について粗々述べてきたが、隼人と言えば普通「阿多隼人」(8世紀の薩摩国建国以降「薩摩隼人」に改称)、「大隅隼人」ぐらいしか知られていないと思うので、最後にその問題について一言しよう。

性急に述べてしまえば、隼人の一部族として「日向隼人」は存在する¹⁵⁾。しかし、同じく『続日本紀』巻第六・和銅6(713)年4月の条には、「日向国の肝坏・贈於・大隅・始羅の四郡を割きて、始めて大隅国を置く」(一・197 ページ)とあるから、この隼人が宮崎の隼人を意味しているとは限らず、むしろ「曾君」という名前等より、藤波三千尋も説く¹⁶⁾如く、後に大隅隼人と呼ばれるものと同一¹⁷⁾と考えた方が良いであろう。ならば宮崎には隼人がいなかったかと言うと、そんなことはあるまい。宮崎南部で伝承されている弥五郎どん伝説等があるからである。

伝説によれば弥五郎どんは隼人の長で、養老4(720)年2月の隼人の反乱¹⁸⁾の時、朝廷と激しく戦い、その時の霊を慰めるために始まったのが、山之口町の野正八幡や日南市の田上八幡神社等に残る弥五郎どん祭りだとされている。また、髪長姫や三毛入野命等、宮崎の他の伝承や、古墳等の考古学的資料まで視野に入れた日高正晴も、やはり宮崎に海人族の一団が存在したことを示唆しており¹⁹⁾、その可能性は高いのである。

ゆえに、今後は隼人の視点も入れた宮崎の文化の分析が必要だと思う²⁰⁾ののだが如何であろうか。

注

- 1) 別冊歴史読本事典シリーズ『日本「神社」総覧』(新人物往来社 1994年)
- 2) とともに、山口保明『宮崎の神楽 祈りの原質・その伝承と継承』(鉾脈社 2000年)による。以下、「山口の書」とはこれを言う。
- 3) 「山口の書」では12番となっているが、地元の人のお話では、その後3番ほど復元されたいらしい。
- 4) 10番の「御笠」を山口は、「田植神楽」という別名や、そこで唄われる詞章(田の神をまつりてみれば稲積のこれぞ誠のうぐやなりけん)等から作神楽と位置づける。基本的にはこれも良いような気もするが、右の写真に見られるような、一見僧侶を思わせる舞手の出で立ちと「6」という数から、仏教的影響を考えてみるのも良いのでは

ないか。



- 5) 山口の書によれば「釣舞」だが、2006年2月11日に現地で配布された番付表による。
- 6) ホームページ「みやぎきの神話と伝承101」中の、山口保明による潮嶽神社の解説。
- 7) 正確には⑦は「大戸之道尊」なのだが、「の」が表記されないことは古典において良くあるので、こう言って差し支えないと考える。
- 8) 但し、櫛石窓神、豊石窓神は同じ天石門別神の別名なので、二柱の神と数えることには疑問があるが、伝承の途中でこのくらいの間違いは生じるであろう。
- 9) 言うまでもなく「滞」と「滯」は止まるという意味で共通する。
- 10) 『日本の神様読み解き事典』は、民俗神についても検索できる。
- 11) 写真は白黒で判別できないと思うので一言しておく、中央が黄で一番左が紫。次いで白。一番右は朱で二番目が緑と、色の対照は正しくなされている。これも他の神楽では余り認められず、この神楽はかなり良く原型が保存されていると分かる。
- 12) ほぼ全ての注釈書に載せられていることだが、「櫛石窓」「豊石窓」の「窓」は正しくは「真門」で、それゆえ門の守護神なのである。
- 13) これも基礎的な注だが、日本神話で先ず誕生するのは天之御中主神を始めとする三神、次いで宇摩志阿斯訶備比古遲神と天之常立神で合わせて五神（これも奇妙な計算方法であることは言うまでもない）だから、これを七と数えれば、三五七の数列が誕生するというわけである。
- 14) 日高正晴『西都原古代文化を探る 東アジアの観点から』（鈺脈社 2003年）第2部

「記・紀」が語る古代日向 第五章 吾田族伝承と日下部氏

- 15) 『続日本紀』巻第五・和銅3(710)年正月の条「庚辰、日向の隼人曾君細麻呂、荒俗を教へ諭して、聖化に馴れ服はしむ。詔して外従五位下を授けたまふ」(以下、『続日本紀』の引用は岩波・新日本古典文学大系により、巻数及びページ数を示す。一・161ページ)。
- 16) 藤波三千尋「クマツと隼人—その書き分けを考える—」(志學館大学生涯学習センター・隼人町教育委員会編『隼人学』(南方新社 2004年)。
- 17) 薩摩は和銅3年より早い大宝2(702)年にやはり日向から分立しているから、注15)の記事が薩摩隼人を意味することはあるまいと思う。
- 18) 壬子、大宰府奏して言さく、「隼人反きて大隅国守陽侯史麻呂を殺せり」とまをす。(二・67ページ)
- 19) 注14)と同書。
- 20) 注14)で紹介した日高の書は、サブタイトルから窺えるように、大陸との繋がり的重要性を説く。勿論それも必要なのだが、最近発掘された韓国の古墳との関係等を除いては、むしろその方面の研究は比較的なされてきたように思う。ところが隼人は敗北した民であることもあり、その実態は歴史にほとんど残されていない。それ故こうした提言をしてみたのである。